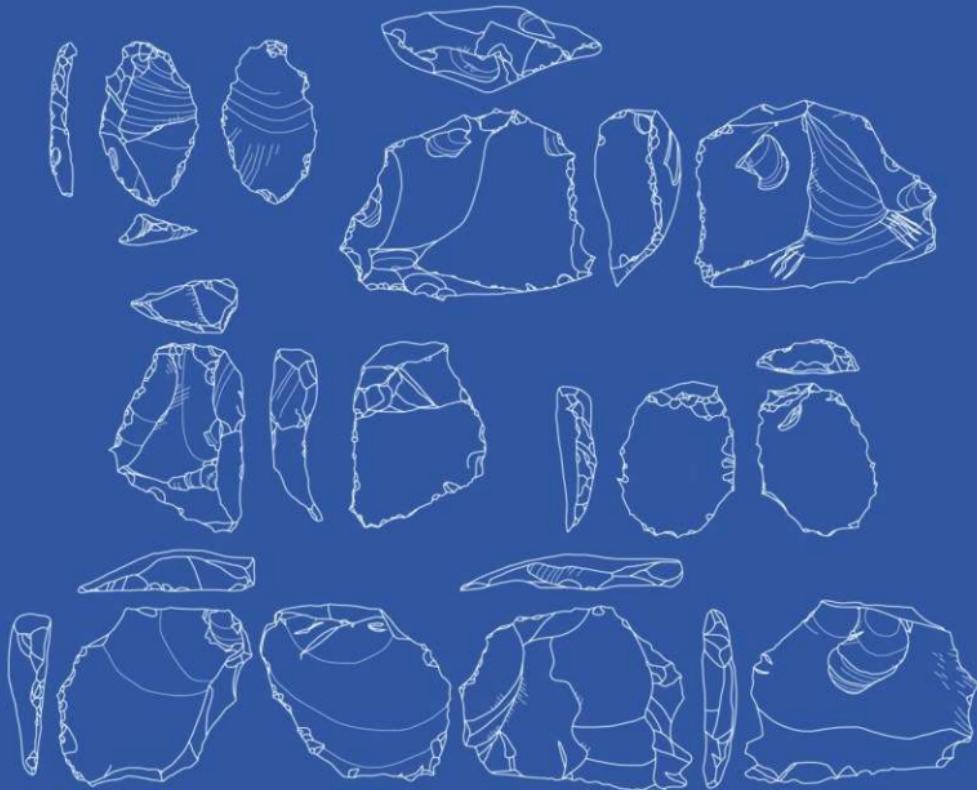


平成 27 年度 飯豊町遺跡発掘調査報告書(1)

飯豊町教育委員会埋蔵文化財調査報告書第 5 集



2016年
飯豊町教育委員会



序

本書は飯農町教育委員会が平成27年度に実施した町内における遺跡発掘調査事業の成果を報告するものです。本年度は埋蔵文化財行政の推進を目的として国庫補助を受け、町内における遺跡の分布調査を実施しました。

飯農町には70か所を超える埋蔵文化財包蔵地が登録されており、縄文時代の遺跡を中心に各時代の遺跡が所在しています。特に中世には長井氏、伊達氏の支配地域であったことから、中世の城館跡が多数みられます。

飯農町ではこのような文化財を活用した事業を進めており、埋蔵文化財についても分布調査を行うことで、埋蔵文化財の把握と記録、町内外への情報の発信、活用を進める取組みを行っています。今年度は、萩生城跡および中津川白川遺跡周辺について分布調査を実施しました。

埋蔵文化財は、私たちの祖先が長い歴史の中で創造してきた貴重な地域財産です。この財産を大切に保護するとともに、そこから歴史を学び子孫へ伝えることが、現代に生きる私たちの責務だと考えます。今後、本書が文化財の保護活動、学術研究、教育活動等に役立つことになれば幸いです。

最後に当調査にご支援ご協力いただいた皆様に心から感謝申し上げます。

平成28年3月

飯農町教育委員会

教育長 佐藤 晴樹

例　　言

1 本書は、飯豊町教育委員会が国庫補助を受けて実施した、平成27年度以降の開発事業との調整並びに遺跡台帳整備に資する町内遺跡詳細分布調査の報告書である。

2 事業期間は平成27年4月3日から平成28年3月31日までである。

3 調査体制は次のとおりである。

調査主体　飯豊町教育委員会

発掘調査・資料整理担当者

調　　査　員　高橋拓（教育文化課生涯学習振興室　文化財保護専門員）

　　楠千栄美（教育文化課生涯学習振興室　文化財調査員）

作　業　員　後藤通雄、佐藤節雄、土屋秋夫、平山森司

調査協力者　秦昭繁、山野井徹、

　　佐藤侑希、山口広貴（飯豊中学校2年生職場体験）

事　務　局　飯豊町教育委員会教育文化課生涯学習振興室

　　佐藤誠一郎（教育文化課課長）

　　宇津木耕一（教育文化課生涯学習振興室室長）

　　伊藤敏英（教育文化課生涯学習振興室主査）

4 調査並びに報告書作成にあたり、次の方々にご指導ご協力をいただいた。ここに記して感謝申し上げます（五十音順、敬称略）。

阿古島功、岡村道雄、稲田孝司、国分剛、佐藤庄一、澤田敦、斗叶冬樹、長井謙治、村越純子、山形県教育庁文化財生涯学習課。

5 報告書の編集・執筆・写真撮影・挿図は楠千栄美が担当し、高橋拓が監修した。



萩生城周辺分布調査　現地説明会風景

凡　　例

- 1 本報告書の遺構図中の用例は以下のとおりである。
 - (1) 図中の方位は磁北を示す。
 - (2) 図中の水系はすべて海拔高度を示す。
 - (3) 縮尺率はそれぞれ図中に示した。
- 2 本報告書の遺物の実測図中の用例は以下のとおりである。
 - (1) 原則は $1/4$ で採録し、各々にスケールを付した。
 - (2) 遺物番号は、遺物図版・写真図版ともに共通のものとした。
- 3 遺構の写真図版については任意の縮尺とした。
- 4 土層の色調に関しては小山正忠・竹原秀雄編著『標準土色帳』(日本色研株式会社、1967年)を基準に視認している。
- 5 本書で使用した遺構・遺物を指し示す略号は、C…土器、陶磁器 S…石 W…木である。



ヤルミ沢露頭調査

目 次

分布調査

1. 調査の目的	1
2. 調査地点	1
3. 萩生城周辺の分布調査	
3 - 1 調査の経緯	2
3 - 2 遺跡の環境	2
3 - 3 歴史的環境	2
3 - 4 調査の経過	3
3 - 5 トレンチ調査の結果	3
A トレンチ	
B トレンチ	
C トレンチ	
D トレンチ	
E トレンチ	
F トレンチ	
G トレンチ	
H トレンチ	
I トレンチ	
3 - 6 調査結果	5
4. 白川遺跡周辺の分布調査	
4 - 1 調査の経緯	12
4 - 2 歴史的環境・地理的環境	12
4 - 3 調査の経過	13
4 - 4 露頭の土層調査	13
4 - 5 ヤルミ沢の河床・露頭の礫種・円磨度調査	13
4 - 6 遺物の検討	14
4 - 7 炭素年代測定の結果	15
4 - 8 調査結果	15

挿図目次

第1図	飯豊北部遺跡地図	2
第2図	萩生城周辺平面図	6
第3図	萩生城周辺断面図（1）	7
第4図	萩生城周辺断面図（2）	8
第5図	萩生城周辺断面図（3）	9
第6図	萩生城周辺断面図（4）	10
第7図	萩生城周辺断面図（5）	11
第8図	飯豊北部遺跡地図	12
第9図	白川遺跡周辺平面図	13
第10図	ヤルミ沢露頭断面図	22
第11図	ヤルミ沢露頭採取遺物実測図	23

表目次

表1	飯豊北部遺跡一覧	2
表2	飯豊北部遺跡一覧	12
表3	疊種・円磨度（ヤルミ沢露頭全体）	16
表4	疊種・円磨度（ヤルミ沢露頭3層）	17
表5	疊種・円磨度（ヤルミ沢露頭4層）	18
表6	疊種・円磨度（ヤルミ沢河床）	19
表7	ヤルミ沢採取遺物一覧表	20
表8	炭素年代測定の試料	21
表9	炭素年代測定の結果	21

写真図版

写真図版1	25
写真図版2	26
写真図版3	27
写真図版4	28
写真図版5	29
写真図版6	30
写真図版7	31
写真図版8	32
写真図版9	33
写真図版10	34
写真図版11	35

分布調査

1. 調査の目的

飯豊町では近年、遺跡が所在する地域で開発が行われる可能性がでている。本町では74ヶ所の遺跡が把握されているが、そのほとんどが表面踏査で確認されたもので、また周知されていない遺跡の存在も多数予測されている。

このようなことから飯豊町としては、周知の遺跡については遺跡の詳細を明らかにし、また未周知の遺跡についてはその存在を確認することで、遺跡台帳の整備をすすめ、今後起こり得る開発行為に対処する必要性がある。よって遺跡台帳に反映させるデータを得る目的で平成27年度に遺跡詳細分布調査を実施した。

埋蔵文化財包蔵地及び遺跡可能性地について踏査、試掘調査を行い、遺跡の有無・範囲・性格など、内容を明らかにする調査を実施した。この調査によって得られた結果は、今後各種開発計画との調整に資され、遺跡の保護・保存のために活用されるものである。なお今年度遺跡詳細分布調査を行った地点は以下の2箇所である。

2. 調査地点

(1) 萩生城周辺 山形県西置賜郡飯豊町大字萩生1380-3

現地表の遺構の平面図を作成、小規模なトレンチによる試掘をもとに本丸範囲を推定し、本丸の遺構残存状況を把握する。この調査によって、遺跡台帳の情報整理を行う。

(2) 白川遺跡周辺 山形県西置賜郡飯豊町大字上屋地九才沢

当地に所在するヤルミ沢において、頁岩が出土する露頭部が確認できていることから、その土層を調査した後、石器資料を採取する。石器が出土する層位から炭素を採取し、放射性炭素(¹⁴C)測定を実施する。この調査によって、遺跡台帳の情報整理を行う。

3. 萩生城周辺の分布調査

3-1. 調査の経緯

萩生地区では、地域活性化を目的とした「萩生地区整備計画」が萩生地区協議会によって企画されている（実施は未定）。この計画は、町指定の遺跡「萩生城跡」を歴史公園として整備する「城跡公園整備計画」を含んでおり、今後、萩生城址に関わる埋蔵文化財との兼ね合いが課題となる可能性がある。このような状況に対して、萩生城跡周辺の分布調査を実施し、遺跡・遺構・遺物の分布状況を確認した。

今後整備計画が進展し、開発が行われることになった場合、調整に有効なデータを遺跡台帳に提示することができる。



図1 飯豊北部遺跡地図

3-2. 遺跡の環境

萩生城は飯豊町の北東部、萩生川流域に位置する萩生地区に所在する。萩生城は、萩生川の左岸、扇状地形扇端の微高地に築かれた平城で、明治8年（1875）の地籍図からは、主郭部と出丸で構成される複郭式の平城と、それを中心とした城下町的な町割りがあったと考えられている。本年度の調査対象となる主郭部は南北145m、東西77mで、面積はおよそ1,116平方メートルである。周辺には縄文時代中期末の居住跡とされる萩生石室遺跡もあり、当地は町内でも遺跡の集中する地域である。

3-3. 歴史的環境

萩生城は、伊達氏の家臣である国分氏の居城で、伊達氏が置賜地方を攻略した天授6年（1380）頃に初代国分政信が築城した城だと伝わっている。国分氏は、伊達政宗から嘉慶2年（1388）に長井庄萩生郷を、応永9年（1402）には刈田郡平沢郷（現宮城県）に知行配分を受けているが、その後、伊達信夫郡・最上郡などにも所領を拡大していることや、永正6年（1402）に伊達尚宗の軍勢催促の命を受けた国分平五郎胤重が、下長井の被官衆に回状を発していることから、自立性の高い国人領主であったと考えられている。萩生城は天正19年（1591）に伊達政宗が岩手山に移封するとともに廃城になったとも、蒲生時代には赤座八右衛門が城主となったともいわれている。近世初頭には間違いなく廃城しており、当地は桑畠として使用されたという。また萩生城の二ノ丸と考えられている場所には、現在、成就院廻向山恩寺が建っている。もともと恩寺は同町の山王原に建っていたが、応永年中（1394～1427）、国分家三

遺跡番号	遺跡名	年代
403-001	中村館	
403-002	灰鈴環遺跡	縄文中期
403-003	野山I遺跡	縄文時代
403-005	沼ノ原遺跡	縄文時代
403-006	坂場遺跡	縄文晩期
403-007	台の上遺跡	縄文時代中期
403-008	郡の神南遺跡	縄文時代
403-014	町下遺跡	縄文時代 不明
403-032	長者原遺跡	縄文時代
403-033	深川古墳	
403-034	深川館	
403-035	黒沢中頃	
403-036	柳沢B遺跡	縄文時代
403-037	裏山II遺跡	縄文晩期
403-039	裏山III遺跡	縄文時代
403-040	野山III遺跡	縄文時代
403-041	才先林遺跡	縄文前期
403-042	樅山遺跡	縄文前期
403-043	館の宮	
403-044	野山II遺跡	縄文前期？
403-045	中村荒船	
403-046	中川原遺跡	縄文時代中期、後期
403-048	下野遺跡	縄文中期
403-049	手ノ子南館	
403-050	柳沢A遺跡	縄文時代後期、中期
403-052	黒沢館	
403-053	椿館	
403-054	黒沢南館	
403-055	野山IV遺跡	縄文時代
403-056	萩生城	
403-057	熊ノ越	
403-058	裏山I遺跡	縄文晩期
403-059	町屋敷	
403-060	手ノ子西館	
403-061	野山V遺跡	縄文中期？
403-063	観音堂遺跡	縄文時代
403-065	大桑寺頭	
403-066	上野遺跡	縄文時代
403-067	石箱遺跡	縄文時代中期、後期
403-068	新山遺跡	縄文時代
403-069	椿古館	
403-070	御堂遺跡	縄文時代中期、後期
403-072	椿城裏山廬跡	近世

表1 飯豊北部遺跡一覧

代光信の代に祈願所として現在の地に移されたといわれている。

明治14年（1881）には萩生小学校が建設され、昭和48年（1973）に閉校するまで5回にわたり増築・改造がなされている。閉校後は、コミュニティーセンターが建設された。現在も建物は残っているが閉鎖されている。

今も地表には、土壘や掘跡といった城館を構成する遺構が確認できるが、本丸跡地には閉鎖されたコミュニティーセンター、二ノ丸には恩徳寺が所在しており、また土壘には、散歩道や墓石が設置されていることから、遺構が破壊されていることが予想される。

3-4. 調査の経過

2015年7月21日 検査準備、実測作業

2015年7月24日 絵図面探索

2015年7月28日～30日 実測作業

2015年8月26日 重機手配

2015年9月4日 検査の準備

2015年9月11日 実測作業

2015年9月15日～24日 試掘調査

2015年10月3日 現地説明会、試掘調査

2015年10月7日～14日 試掘調査

2015年10月17日 埋戻し

2015年11月～2016年3月 報告書作成

3-5. トレンチ調査の結果(図2)

遺跡の有無、遺構の残存状況の確認、その範囲確定のため、萩生城跡に計9か所のトレンチを設定した。トレンチの場所は可能な限り遺構の保存を重視して設定している。

A トレンチ(図3)

Aトレンチは萩生城本丸の西側、土壘といわれている土の高まりに東西方向に幅70cm、長さ6m70cmで設定した。一部地山を確認するまで掘り下げを実施した。

現状の地表面には草木が茂っており、その落葉が腐葉土化して堆積している。この腐葉土層を1層とする。1層にはビニルやタイル等、近・現代のゴミが含まれる。1層直下の2層は円磨度の高い人頭大の河原石が堆積した層である。10～20cm大の礫が40～50cm厚で堆積する。4層は礫を含む土層である。炭化物を含むことから人為的な盛土層であることが想定される。5層は小ぶりな礫を含む褐色土層で、6層由来とみられる黒色土のブロックを含む。この様相から当層も人為的な盛土層であることが想定される。6層は植物の腐植層とみられる黒色土層である。約10cm厚で堆積する。わずかに炭化物が混入する。7層は均質な粘土層で地山だと推測される。

近・現代のゴミが含まれるのは1層のみで2層以下では全くみられない。礫層が丘状に堆積する状況や、4層から6層に炭化物が含まれる状況から、2層から5層は人為的な堆積層であることが推測できる。また6層は自然堆積層で、その直上に盛土がなされたことが推測される。このような結果から当地点は、人為的に盛土された萩生城の土壘であった可能性が高いと判断する。また2層が土壘の表面を構成したことが想定され、石壘ともいえるような特徴ある土壘だったと考えられる。

B レンチ (図3)

B レンチは、A レンチから南に 5 m の位置、萩生城本丸の土壘といわれている土の高まりに東西方向に幅70cm、長さ 2 m 40cmで設定した。A レンチの 2 層に相当する疊層が 4 層として確認できる。1 ~ 2 層に近・現代のゴミが混じる。4 層の状況から当地点は土壘の裾部分にあたることが想定された。

C レンチ (図4)

C レンチは、現在の公園の施設である砂場と東屋の間に東西方向に設定した。聞き取りから当地点は現代に盛土がなされたことが想定された。東屋は床面をコンクリートで固めている。下位層において近・現代の搅乱が確認でき、3 ~ 4 層に磁器・ガラス片・ビニル紐等のゴミが確認される他、5 ~ 6 層にコンクリート側溝が設置されている。おそらく萩生小学校に伴う遺構だと考えられ、当地点では萩生城の遺構は破壊されていることが想定された。

搅乱層から、フクロウの陽刻がある型押整形の角皿、いげ皿など明治期の生産が想定される磁器が出土した。また碟子・クリーム瓶なども出土した。一点のみ中世陶器とみられる陶片が出土したが、細片であるため確定は避ける。

D レンチ (図4)

D レンチは、砂場やプランコなどの遊具が設置されている現代の盛土の裾に、東西方向に幅70cm、長さ 3 m 20cm で設定した。1 ~ 2 層に現代の盛土が確認できる。2 層はグライ化している。4 層とした地山層の直上には、コンパネなどの木材、ブルトップ型のコカコーラの缶が含まれる。ここから地山直上まで現代の搅乱が及んでいることが理解でき、萩生城の遺構があったとしても破壊されたことが推測できる。

E レンチ (図5)

E レンチは萩生城本丸の推定中心部付近、現在、ゲートボール用のグラウンドが敷設されている地点に設定した。レンチは南東に幅70cm、長さ 10 m 70 cm に設定した。

全体的に層が水平に堆積していることがわかる。1 層は山砂と土が互層堆積する層で、ゲートボール場のための盛土である。2 層も山砂の盛土層である。3 層は河原石を多量に含みグライ化した砂層である。地元住民からの聞き取りによると、萩生小学校があった時期、子供達に近隣の野川から河原の砂を運ばせてグラウンドの整備を行っていたという。この情報から 3 層は萩生小学校が廃校になった際のグラウンド表面であったと想定される。またその下の 5 層は明治期の小学校創設時のグラウンド面ではないかと想定する。7 层ではところどころで、その上面からの遺構の掘り込みが確認できる。また 7 ~ 8 層は炭化物・焼土を含む土層であることから盛土であることが想定される。遺構が確認される 7 層は、レベル的に萩生小学校との関係性は考えにくく、より古い時期の地表面だと想定できる。遺物の出土がないことから時期を明確化することはできないが、盛土によって構築した萩生城時代の地表面の可能性が想定される。9 層は A レンチの 6 層に相当する植物の腐植層だと推測する。6 層のレベルは A レンチの 9 層に比べて 80cm 程度低い位置にあたる。ここから 7 層は、かつて東から西に向けて傾斜していた当地の自然地形に行った盛土で、平場を形成するためのものであったことが想定される。

F レンチ (図6)

F レンチは、萩生城本丸の東端を確認するために設定した幅70cm、長さ 7 m 10cm のレンチである。

1 層は雑草の腐食堆積層である。2 ~ 3 層にはアスファルト片・ガラス片・ビニル・発泡スチロールなど、現代ゴミが多数含まれる。おそらく現代に平場を拡張する目的で、東側の高場から西側の低所に向かって落とし込んだゴミ混じりの盛土だと想定される。

4 ~ 8 層にかけて土層が東から西に向けて傾斜堆積する。9 層は腐食土層、11 層は地山層で A レンチ、E レン

チにも共通してみられる層である。10層は礫層である。直径10~20cmの円磨度の高い礫の層である。層位的には自然堆積層だと考えられるが、状況的には不自然な堆積である。とりあえず現在のところは旧河道路としたい。当トレントチでは萩生城の端部を確定することはできなかつたが、4~7層にEトレントチの6~8層との類似性が見られ、これが萩生城時代の盛土層に相当する可能性も考えられる。

Gトレントチ（図7）

Gトレントチは、旧コミュニティーセンターの建物の東側で、Fトレントチの北側に幅70cm、東西長さ7m90cmで設定した。トレントチF同様、萩生城の範囲を確認するためのトレントチである。1~3層、6層にガラス片や針金、木材片などの近・現代ゴミが含まれる。当地点は小学校やコミュニティーセンター建設時に搅乱された可能性が高く、萩生城の遺構を確認することはできなかつた。6層から鉄製品のテチガイが出土した。

Hトレントチ（図6）

Hトレントチは旧コミュニティーセンター建屋の北側に、幅70cm、長さ4m10cmで設定した。1層はガラス・ビニル・陶磁器など、近・現代遺物を含む。2層は1層と類似した層であるが、粘性が高く近・現代のゴミは出土しない。4層は、Aトレントチ6層と同質の色土である。1~2層との分層が可能で、南から北に向けて急激に傾斜するため人为的に切られた跡だと考えられる。このような状況から当地点は萩生城の北端であることが推定された。1層から「金華山神社参拝記念 昭和三十三年七月 共催日本国有鉄道日本交通公社」と上絵が施された磁器碗、その他土瓶・硝子瓶が出土している。

Iトレントチ（図7）

Iトレントチは推定萩生城跡の北西部に幅70cm、長さ5m20cmで、萩生城の角を確認する目的で設定した。1~2層は山砂に類する砂層で近・現代の盛土だと想定される。3層には炭化物が混入する。また棟瓦が多量に含まれる。地元住民からの聞き取りによると、閉校当時の萩生小学校はトタン葺きで瓦は使われていなかつたという。しかし瓦の形態が棟瓦であることを考慮すれば、近世遺物とは考えにくく、やはり明治期に使用された瓦である可能性が推測される。4層は他の土ブロックが混入するシルト層である。5層は砂礫含みの土層で、やや様相は違うがAトレントチ6層に相当する層である可能性がある。7層は地山層である。6層は溝状の遺構である。当地が萩生城として機能していた時期、地形的に当地点は土壘の下に位置したことが予測される。そのため、この溝跡は萩生城が機能する以前の遺構である可能性が高く、当地には中世以前の遺跡がある可能性も想定された。遺物は出土していない。

3-6. 調査結果

地表面に堀跡・土壘などの遺構と思しき痕跡があることから当地域は城跡だと認識してきた。今回のトレントチ調査によってこれらの痕跡が人為的に土を動かし、構築された城跡の遺構であることが推定された。また土壘周辺の基本層序から、城が機能していた際の表土層が広範囲に残存している可能性が認識された。しかし中世遺物を採取することができなかつたため、これらの遺構・土層の明確な時期を明らかにすることはできなかつた。

また周辺を踏査した際、二の丸だと考えられている場所で15世紀に比定されるカワラケが表土採取された。このような遺物からは当地域が中世の城跡である可能性は高いと判断できた。今後分布調査の範囲を広げ、さらに遺跡範囲を確定していく必要性がある。

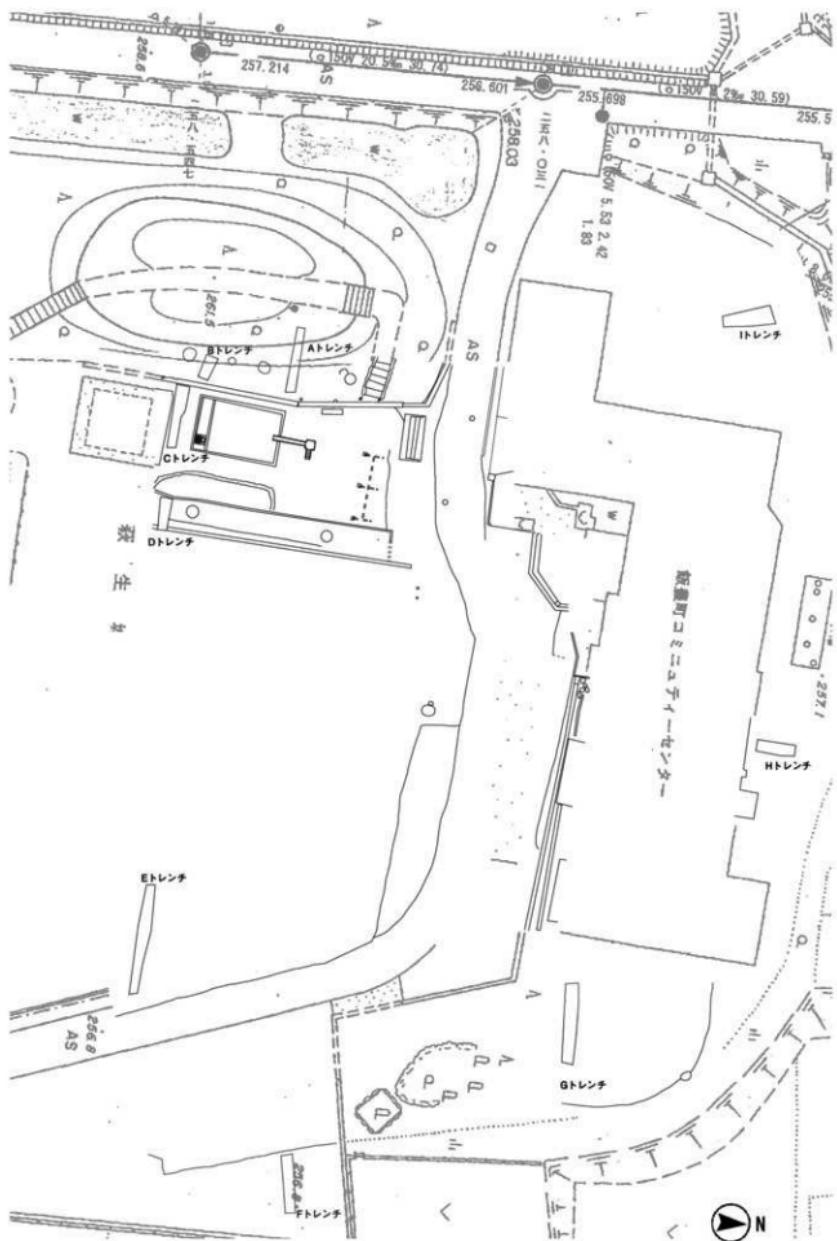


図2 萩生城周辺平面図

0 5m

A レンチ注記

A レンチ注記	土色	土質	絆り
1.10R2/2	土	無し	落葉・雜草の落葉土層。空き缶、ビニール、タイル、その他ゴミを含む。
2. —	石	無し	直径 20 ~ 10cm 大の礫層。円滑度の高い河原石。やや空隙が目立つ。
3.10R2/2	土	有り	直径 10 ~ 5cm 大の礫を少量含む。10R1/4 級のbrook をやや含む。
4.10R2/2	土	有り	直径 5cm 大の礫を少量含む。砂粒を少量含む。炭化物を含む。
5.10R1/4	土	有り	直径 1cm 大の礫を少量含む。10R1/7/1 シルトを少量含む。
6.10R1/7/1	土	有り	10R1/4 土brook を微量含む。炭化物を含む。
7.10R3/3	粘土	有り	均質。地山層。

E

—

W

—

E

—

W

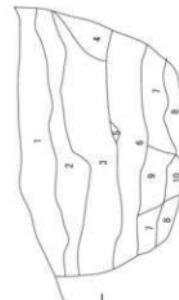
—

B レンチ

259 000 —

W

—



259 000 —

0
(S=1/40)

10

B レンチ注記

B レンチ注記	土色	土質	絆り
1.10R 2/1	土	無し	50%以上が礫物。
2.10R 2/1	土	無し	直径 20cm 大の礫 30%含む ビニールゴミを含む。
3.10R 3/1	土	有り	砂礫を少量含む。
4. —	礫	無し	直径 40cm 大の礫を多数含む。
5. —	礫	無し	直径 15cm 大の礫層。
6.10R 2/1	土	有り	2cm 大の礫を少量含む。10R 4/4 シルトを少量含む。
7.10R 1/7/1	シルト	有り	1cm 大の石を少量含む。
8.10R 4/4	シルト	有り	均質。
9.10R 2/1	土	無し	10R 4/4 brook を含む。燃土含む。直路 2cm 大の礫を少量含む。

図3 萩生城跡周辺レンチ断面図(1)

C レンチ

E ————— W

258 000 —————

W

E

257 000 —————

256 000 —————

255 000 —————

— C レンチ注記

1. 土色 細り

無し 露食層。

2. 10YR5/4 砂 有り 山砂。

3. 10YR2/2 無し 砂多量含む。炭化物含む。

4. 10YR2/1 無し 砂含む。ガラス、現代ゴミ含む。

5. 10YR2/2 土 有り 砂多量含む。

6. 10YR4/4 砂 有り 砂多量含む。

D レンチ

E ————— W

258 000 —————

257 000 —————

256 000 —————

— D レンチ注記

1. 土色 細り

砂 有り 山砂による盛土。

2. 10YR 2/1 砂 有り 山砂による盛土。全体的にグライ化する。

3. 10YR 3/4 土 有り 直径3cm以上の礫含む。砂含む。褐色土をやや含む。

4. 10YR 5/6 粘土 有り 地山層。

5. 10YR 2/1 粘土 有り 砂礫を少量含む。

6. 10YR 5/1 土 有り 全体的にグライ化する。

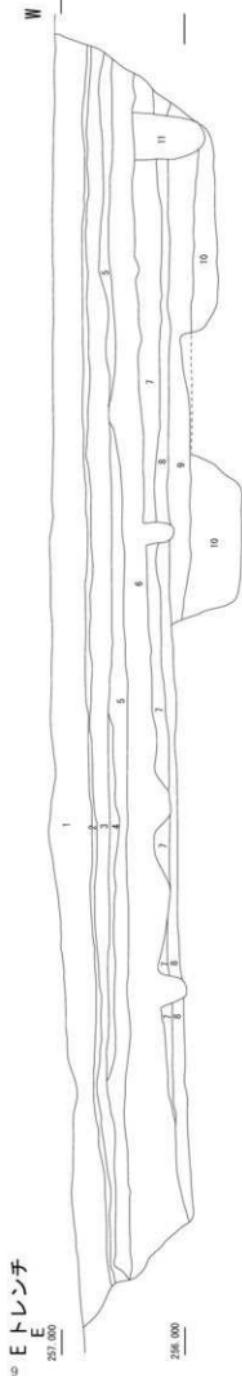
7. 7.0YR 5/6 粘土 有り 砂礫多量含む。炭化物を多量に含む。コシハネなどの木軸を含む。

ブルトープ型のコーラル礁を含む。

8. 10YR4/6 砂 有り 褐色土を少量含む。

図4 萩生城跡周辺レンチ断面図（2）

(S=1/40)



E レンチ注記

- | 土色 | 土質 | 特徴 |
|--------------|----------|-----------------------------------|
| 1. 10R 4/3 | 土
有り | 山砂と 10R 2/2 土との互層。ダートボール場のための盛土。 |
| 2. 7.5R 5/6 | 土
有り | 山砂。盛土層。 |
| 3. 10R 4/2 | 砂
有り | 砂を多量含む。グラウジ化した砂層。盛土層。 |
| 4. 10R 4/4 | 土
有り | 砂礫を多量含む。グラウジ化した土層。 |
| 5. 10R 2/1 | 土
有り | 直徑 30 ～ 2cm 大の礫を多量含む。炭化物、焼土を少量含む。 |
| 6. 10R 2/2 | 土
有り | 直徑 3 ～ 2cm 大の礫を多量含む。炭化物、焼土を少量含む。 |
| 7. 10R 2/3 | 土
有り | 直徑 5 ～ 1cm 大の礫を多量含む。炭化物、焼土を少量含む。 |
| 8. 10R 4/1 | 土
有り | 炭化物、焼土を含む。 |
| 9. 10R 1.7/1 | 粘土
有り | 直徑 1cm 大の礫を微量含む。炭化物、焼土粒を微量に含む。 |
| 10. 10R 4/6 | 粘土
有り | 均質。地山。 |
| 11. 10R 2/2 | 粘土
無し | 直徑 3 ～ 1cm 大の礫を多量含む。炭化物、焼土を少量含む。 |

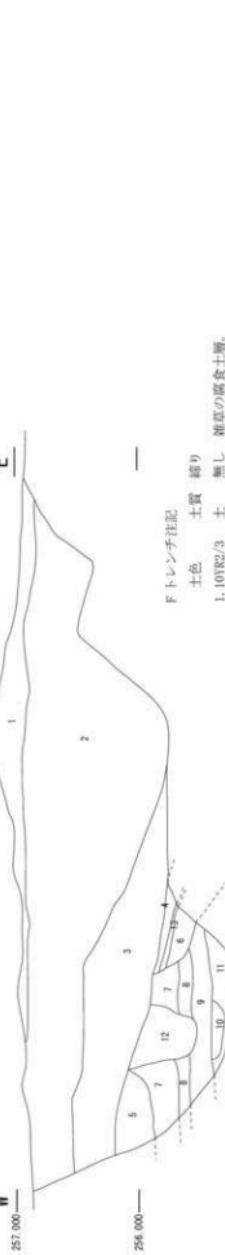
図5 猿生城跡周辺レンチ断面図 (3)

0 (S=1/40) 10

F トレンチ

E

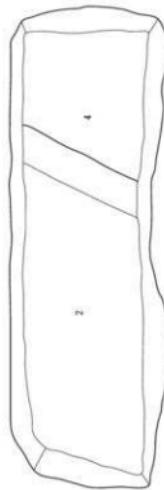
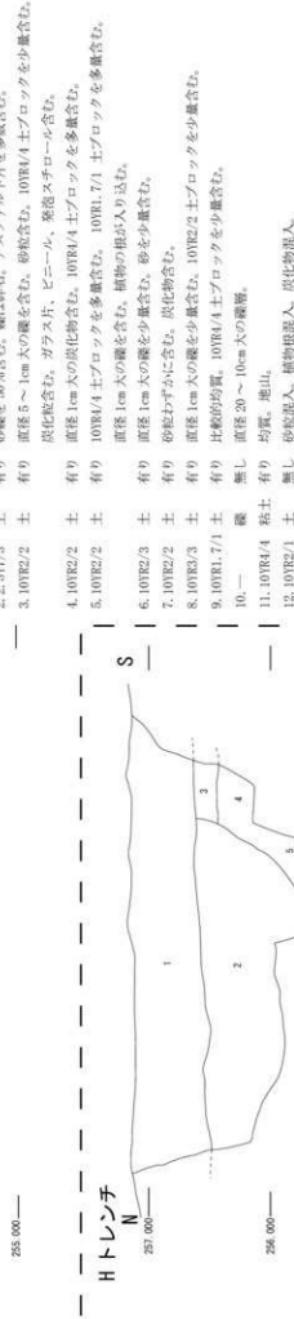
W



H トレンチ

N

S



H トレンチ注記

土色	土質	縫り	
1.10YR2/2	土	無し	直徑 20 ~ 5cm 大の礫を少量含む。
2.10YR2/2	粘土	無し	直徑 5cm 大の礫を多量に含む。 10YR4/4 土ブロックを多量含む。
3.10YR2/1	土	有り	砂粒少量含む。
4.10YR1.7/1	粘土	有り	縫を微細に含む。 砂粒微量含む。
5.10YR3/3	砂	有り	直徑 5 ~ 2mm の礫を含む。 地山。

図 6 草生城跡周辺トレンチ断面図 (4)

(S=1/40)

地山。

4. 白川遺跡周辺の分布調査

4-1. 調査の経緯

昭和45年頃、鶴岡市在住の松本氏が白川遺跡から多量の石器を表探した。その石器は平成23年に「山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館」に収蔵され、平成24年には秦昭繁氏による調査報告が行われた。秦氏はこの報告で、同じ中津川地区に所在する旧石器時代の遺跡「上屋地B遺跡」から出土した石器群と白川遺跡の石器が類似していることを指摘した。また白川遺跡周辺の踏査によって近隣のヤルミ沢に露頭を発見し、ここに石器とみられる珪質岩が多く含まれていること、そしてこの石器が白川遺跡・上屋地B遺跡の石器と類似していることを報告した（秦2012）。

この秦氏の報告により、当地に遺跡が所在する可能性が想定されたことから、飯豊町教育委員会が状況を確認するために分布調査を実施した。秦氏の発見したヤミ沢の露頭は、現状で広く土層が観察できると共に、やはりその中に多数の頁岩が含まれる状況が確認できた。よってこの頁岩を採取し、分析・報告を行うことで分布調査を実施することにした。また露頭の礫種、堆積年代と堆積原因の解明を目的とし、山形大学理学部門叶氏による炭素年代測定を、元山形大学理学部の山野井徹氏に地質学的な分析を依頼した。

4-2. 歷史的環境・地理的環境(図9)

本調査地がある中津川地区は、飯豊町南部の飯豊山北麓、白川上流の河岸段丘上に所在する。先行研究において白川の谷底平野では、沖積低位面のほかに5段の段丘面が認められるとしている。段丘は水平に堆積したシルト層・粘土層だと判断されており、また白川ダムサイト付近に大きな地滑り層が確認できることから、これによってせき止められた「古中津川湖」の存在が指摘され、このシルト・粘土層は中津川湖の堆積地層だと考えられてきた。

中津川地区、白川ダムの上流には白川沿いに18箇所の遺跡が所在する。7箇所の館跡と上屋地B遺跡以外は全て縄文時代の遺跡として登録されている。白川下流から数馬遺跡・上原遺跡・下屋地遺跡・白川遺跡・川内戸遺跡・上屋地A・C遺跡・高造路遺跡・岳谷遺跡の順に並ぶ。白川遺跡は上屋地遺跡の東側に位置し、縄文時代の集落遺跡として登録されている。今回の分布調査地点は、白川にそぐ小流の渓谷、ヤルミ沢沿

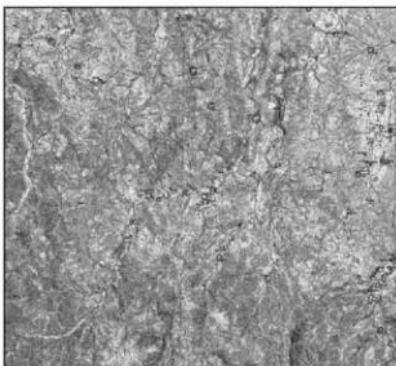


図8 飯農北部遺跡地図

遺跡番号	遺跡名	年代
403-004	矢潤砦跡	
403-009	岩倉館跡	
403-010	高遠路遺跡	繩文時代
403-011	船山遺跡	
403-012	城ノ上・下館跡	
403-013	小星館跡	
403-015	岳谷遺跡	繩文時代
403-016	蓬谷館屋敷跡	
403-017	蓬谷館跡	
403-018	川内戸館跡	
403-019	福地館跡	
403-020	川内戸遺跡	繩文時代
403-021	上屋地C遺跡	旧石器
403-022	上屋地B遺跡	旧石器
403-023	下屋地館跡	
403-024	上屋地A遺跡	旧石器
403-025	上原遺跡	繩文時代
403-026	上原館跡	
403-027	白川遺跡	繩文時代
403-028	下屋地遺跡	繩文時代
403-029	高峰館屋敷跡	
403-030	数馬館跡	
403-031	数馬遺跡	
403-038	小沼遺跡	繩文時代(晚期)
403-047	八幡館跡	
403-051	小坂新館跡	
403-062	赤岩遺跡	繩文時代、中世
403-064	赤岩館跡	
403-071	大館山遺跡	

表2 飯農北部遺跡一覽

いに形成された谷底平野に立地している。白川遺跡から北西方向に約450m離れた地点にある調査地点の岸壁に露頭がみられ、広く土層が確認できる。

4-3. 調査の経過

- 2015年7月22日 現地踏査
2015年8月28日～29日
　調査地の草刈り
2015年10月11日 現地調査
2015年10月15日
　現地調査、露頭断面図を作成
2015年10月21日
　現地調査、露頭断面図を作成
2015年10月22日
　ヤルミ沢河床調査、岩質・円磨度調査、露頭断面図を作成
2015年10月24日 データ整理
2016年1月～2016年3月 報告書作成

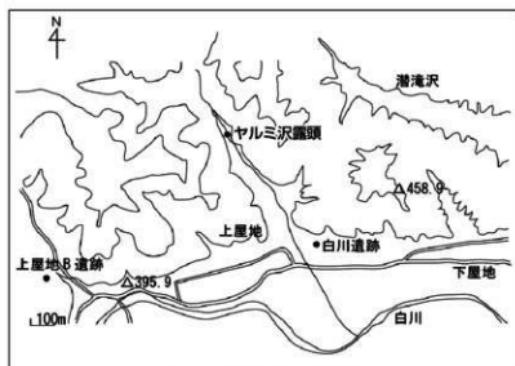


図9 白川遺跡周辺平面図

4-4. 露頭の土層調査（図10）

県道8号線からヤルミ沢を約400m上流に上った地点、河道の右岸に幅約1m20cm、高さ約2mの露頭がみられる。まずはこの露頭の土層断面図を提示し土層の堆積状況を検討する（図10）。

1層は、植物の腐食層とみられる土層である。その下の2層には厚いシルトが砂と互層に堆積している。3層は疊層である。直径1～3cm大の礫、直径10～30cm大の礫がそれぞれ50%含まれており、その中に頁岩が多量に混在する。4層も疊層である。4層は10～40cm大の礫が80%含まれ、3層に比べて直径が大きい礫が堆積する傾向がある。4層にも多量の珪質頁岩が混在する。3・4層ともに直径の大きな疊層で、強い水の流れによる河川堆積だと想定できる。5層にも礫が堆積するが頁岩はみられない。また各層には木質・炭化物が含まれている。6層は泥質層でトウヒ属の球果や針葉樹の葉が含まれる。7層は新第三系とみられる砂岩の基盤岩である。

4-5. ヤルミ沢の河床・露頭の礫種・円磨度調査（表3～表6）

次にヤルミ沢の露頭と河床について、無作為に岩石のサンプリングを実施し、その礫種および円磨度の組成調査を行った。露頭については、296点（3層105点、4層105点、取り上げ遺物86点）のサンプルから組成を分析した。

その結果、露頭の岩石の75%が頁岩であることが分った。その内硬質な頁岩は34%、中質の頁岩は21%、軟質の頁岩は20%である。閃緑岩が1%、凝灰岩は16%、砂岩が8%含まれる。頁岩が圧倒的に多い。閃緑岩は1点だけ例外的に含まれている。

円磨度については円礫・亜円礫・角礫・シャープの4種に分類した上で分析を行った。露頭の岩石の円磨度は、硬質な頁岩がシャープ62%、角礫31%、亜円礫7%である。中質の頁岩はシャープ11%、角礫41%、亜円礫38%、円礫10%。軟質な頁岩は角礫10%、亜円礫58%、円礫32%である。閃緑岩は円礫100%である。凝灰岩は角礫11%、亜円

礫63%、円礫26%。砂岩は角礫8%、亜円礫64%、円礫28%である。

ちなみに露頭の3層に限れば、頁岩71%(硬質22%、中質21%、軟質28%)、凝灰岩14%、砂岩15%で、4層に限れば頁岩77%(硬質42%、中質20%、軟質15%)、閃綠岩1%、凝灰岩17%、砂岩4%である。

円磨度は、3層の硬質頁岩がシャープ54%、角礫46%、中質の頁岩がシャープ4%、角礫65%、亜円礫19%、円礫12%、軟質頁岩は角礫11%、亜円礫52%、円礫37%である。凝灰岩は角礫12%、亜円礫53%、円礫35%で、砂岩は亜円礫68%、円礫32%である。4層の硬質頁岩はシャープ67%、角礫23%、亜円礫10%、中質の頁岩がシャープ15%、角礫23%、亜円礫53%、円礫9%、軟質頁岩は角礫8%、亜円礫68%、円礫24%である。凝灰岩は角礫10%、亜円礫68%、円礫21%で、砂岩は角礫33%、亜円礫50%、円礫17%である。

河床の礫種組成は104点のサンプルから検討している。頁岩が最も多く62%で、硬質な頁岩が24%、中質の頁岩が30%、軟質の頁岩が8%であった。凝灰岩35%、砂岩2%、ホルンフェルス1%である。

円磨度は、硬質な頁岩がシャープ44%、角礫32%、亜円礫20%、円礫4%である。中質の頁岩がシャープ3%、角礫19%、亜円礫49%、円礫29%である。軟質な頁岩は亜円礫50%、円礫50%である。凝灰岩は角礫22%、亜円礫46%、円礫32%。砂岩は円礫100%、ホルンフェルスは1点で角礫100%である。

円磨度については、全体的に露頭より河床の方が高い傾向がある。特に頁岩で亜円礫とシャープの数値が逆転しており、今まで流れの影響を受けてきた河床と、ある時期に流れから切り離された露頭の組成の違いによるものと考える。また、露頭の礫種と現河床の礫種の組成はいずれも頁岩が主体で凝灰岩がこれにつき、砂岩を伴う点で共通しており、ここから露頭の礫の起源がヤルミ沢流域であることが想定される。

4-6. 遺物の検討(図10・表7)

本年度の分布調査において、ヤルミ沢の露頭から86点の珪質頁岩を遺物として採取した。2層から4点、3層からは20点、4層から62点の遺物を採取した。明確な石器は1点(19)のみで、3層から採取した打製石斧の未製品である。また他にも石器の未成品だと考えることができる資料が7点(1, 35, 45, 50, 63, 69, 83)あった。3層から3点、4層から4点採取している。その他は全て頁岩の破片である。また4層から例外的に1点採取された閃綠岩(44)については、河床の礫種調査の結果から、本来ヤルミ沢の流域に存在しない礫種だと考えられ、他の流域から持ち込まれた原石から剥片を取り出すときに使用した道具である可能性を想定し、遺物として認識した。

頁岩の破片については石器か偽石器であるかの判断がもとめられる。この点については前節の礫種と円磨度の分析結果から議論を行うことができる。露頭にみられる円磨度がシャープの礫種は硬質の頁岩に多数みられ、シャープと角礫との合計は90%を超える。中質の頁岩にもシャープは見られるものの、わずかに11%で、硬質な頁岩とは比較にならない割合である。その他の礫種にはシャープは見られない。そして亜円礫と円礫の合計は、軟質な頁岩で90%、凝灰岩で89%、砂岩で92%、閃綠岩で100%である。

露頭の礫は、ある時期におきたヤルミ沢の強い流れによって当地に堆積した可能性が高い。このような堆積過程を想定した場合、流域による転石の影響が考えられ、それは礫の亜円礫化・円礫化を進める影響だと認識できる。つまり本来、ヤルミ沢の露頭における岩石は、軟質な頁岩・凝灰岩・砂岩・閃綠岩のように円磨度が高い状態が自然だと捉えることができる。逆にシャープな状況を保つ頁岩の存在は当地においては異常で、河川流域において人為的な削石加工が行われた可能性を提示するものだと考える。つまり当調査地の硬質な頁岩の破片については石器だと判断することが可能である。ただし、はたして河川内が石器の加工を行った遺跡であるのか、上流の流域周辺に居住地、もしくは石器加工のための遺跡が存在するのかは現在のところ不明である。

4-7. 炭素年代測定の結果（表8・9）

年代測定を実施するため炭化物を各層から採取し、山形大学（YU-MSYグループ）に試料の年代測定を依頼した。各試料の採取位置は図10に提示している。試料の一覧を表8に、その結果を表9に提示した。年代測定の結果、ヤルミ沢の露頭形成の年代は次のように考えられた。

基盤岩を覆う6層の資料の数値は約4万年前である。亜高山性のトウヒ属の球果やモミ属の葉の化石を含むことから、氷期の堆積物と考えられる。4層の資料の年代は縄文時代前期の約7000年前である。疊層の堆積はそれ以前で、古くは4万年前頃までを射程に入れなければならない。3層の資料の年代は鎌倉～室町時代、さらにその上位の2層の資料は戦国～江戸時代初期の年代を示す。このように露頭の土層の堆積年代は上へ向って順に新しい年代を示す。ただし4～5層の疊層については、1回の河川の流れによる堆積層なのか、他の時代に発生した河の流れによって複数回に渡り堆積したものかは、3～4層から試料を細かく採取し、分析を行った上で検討が求められる。

4-8. 調査結果

ヤルミ沢の露頭からは、人為的な加工によって破片化したと考えられる頁岩が多量に確認された。中には未製品の資料も含まれる。これらを本稿では全て石器と認識する。このような石器は、炭化物の年代測定の結果から縄文時代前期に加工された可能性が高いと考える。また石器を含む層が、縄文、鎌倉～室町、戦国～江戸時代初期に順次堆積していることを考慮すれば、石器を加工した遺跡は当地よりもヤルミ沢沿いの上流に位置している可能性が高いと判断できる。ただし、石器加工を行った遺跡が仮に河川流域内に所在した場合、今後、これを確認することは難しいといえる。露頭から採取した石器の由来について、詳細な状況を確認するためには、今後、河川流域に沿った分布調査を実施する必要性がある。

引用文献

- 飯豊町史編纂委員会『飯豊町史・上』（飯豊町、1986年）
- 山形県教育委員会『山形県中世城館遺跡調査報告書 第1集（置賜地域）』（山形県、1995年）
- 秦昭繁『上屋地B遺跡と飯豊町中津川地域の再評価』（『山形考古』9巻4号、2012年）
- 芹沢長介『日本の旧石器時代』（岩波書店、1982年）
- 堤隆『列島の考古学』『旧石器時代』（河出書房新社、2011年）
- 米地文夫・加藤 稔『山形県中津川・上屋地の前期旧石器遺跡とその周辺の地形』（『東北地理』21-3、1969年）

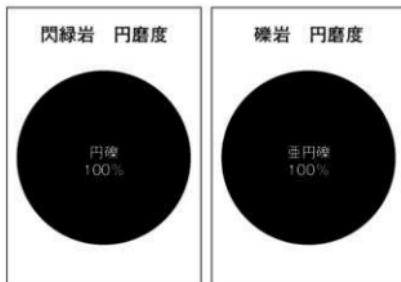
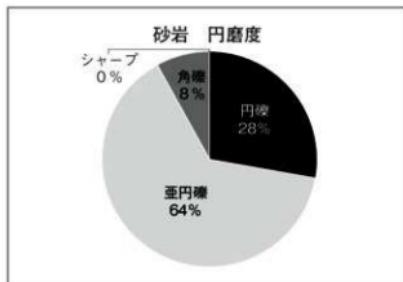
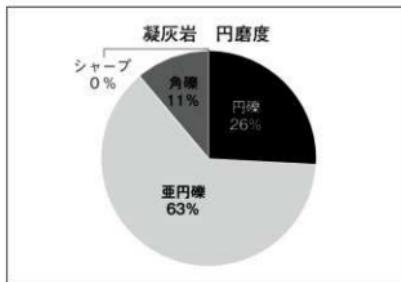
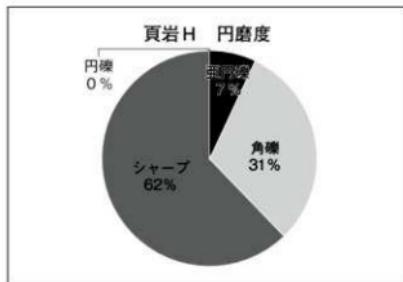
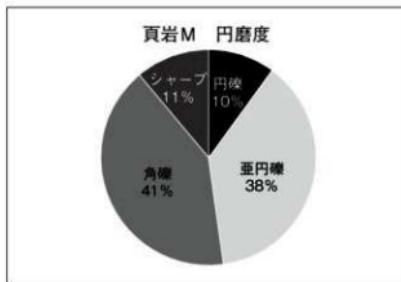
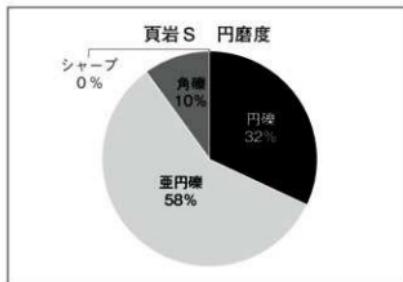
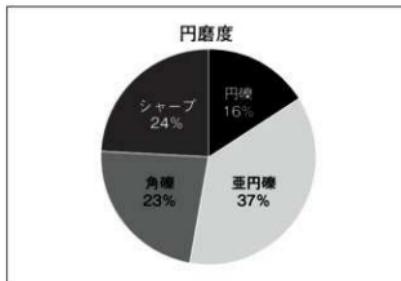
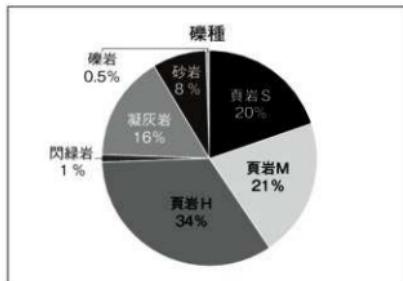


表3 種類・円磨度 (ヤルミ沢露頭全体) (S : 軟質, M : 中質, H : 硬質)

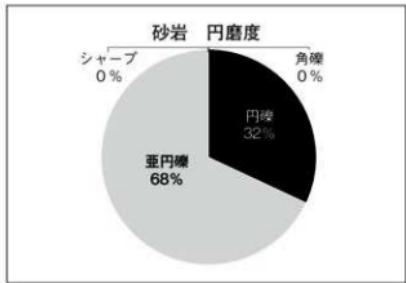
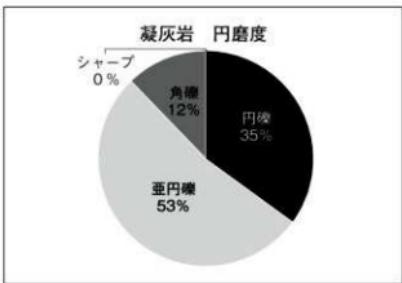
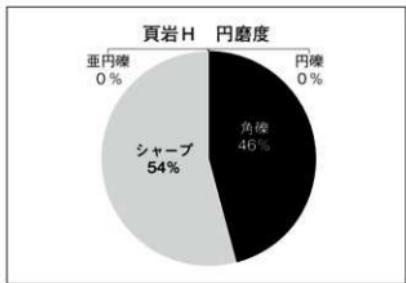
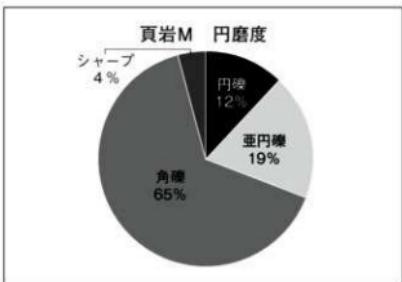
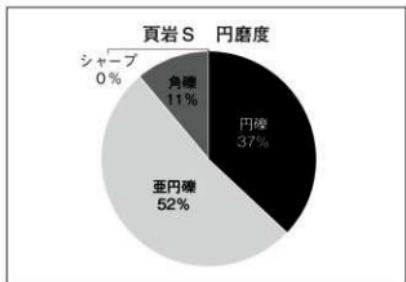
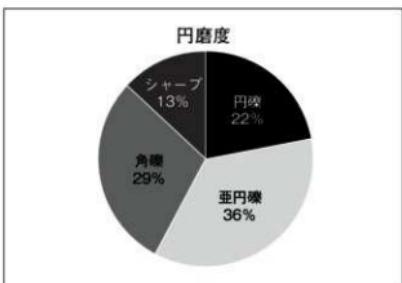


表4 積種・円磨度（ヤルミ沢露頭3層）（S：軟質、M：中質、H：硬質）

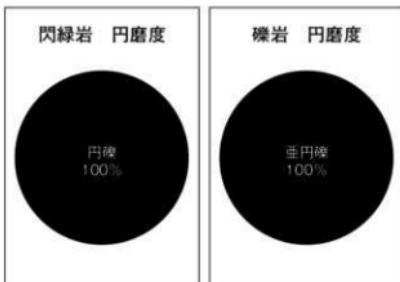
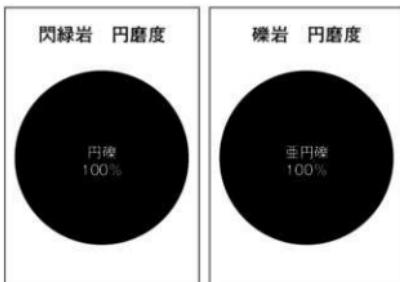
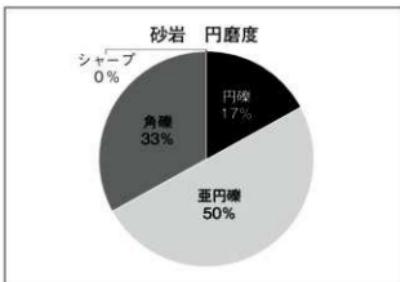
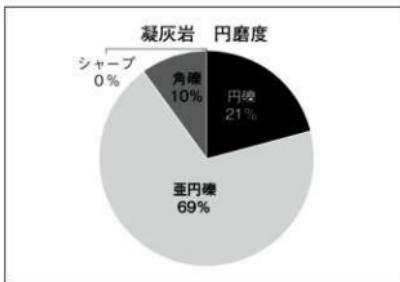
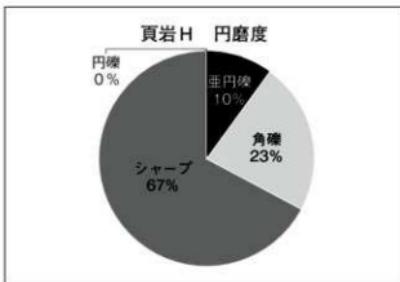
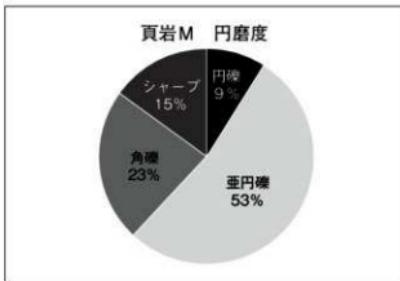
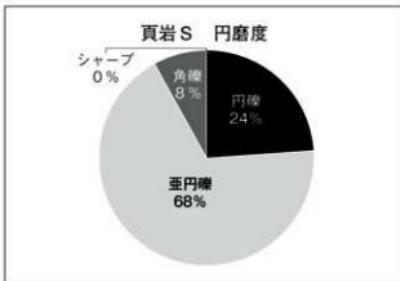
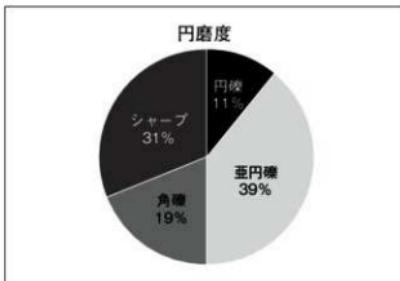
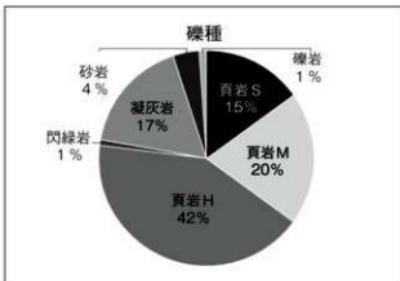


表5 種類・円磨度 (ヤルミ沢露頭4層) (S : 軟質, M : 中質, H : 硬質)

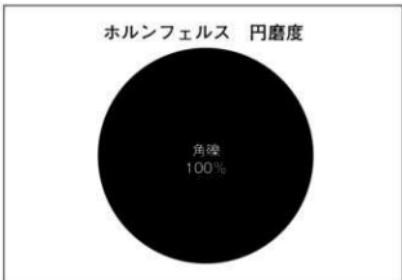
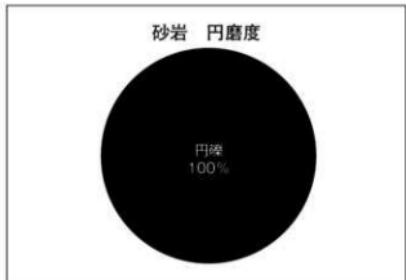
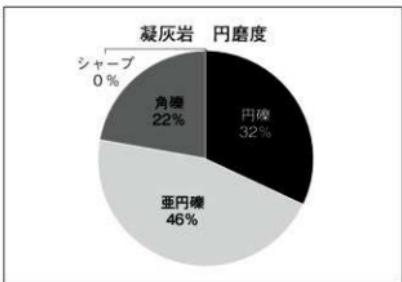
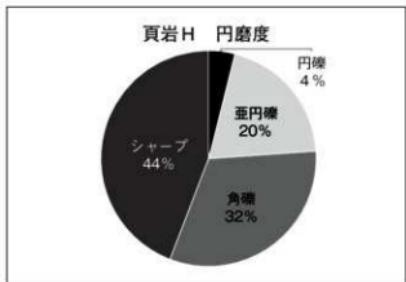
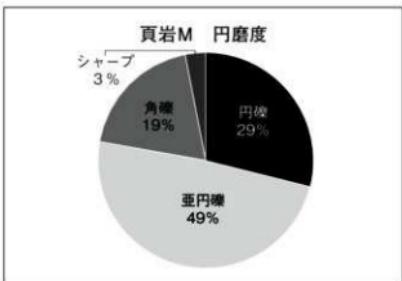
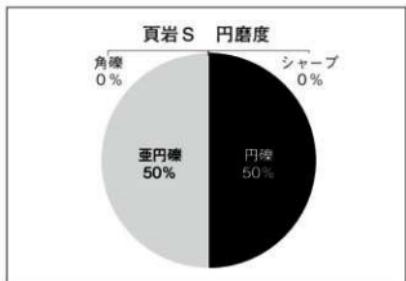
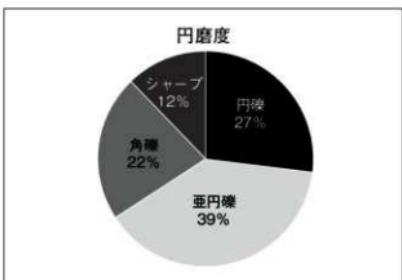
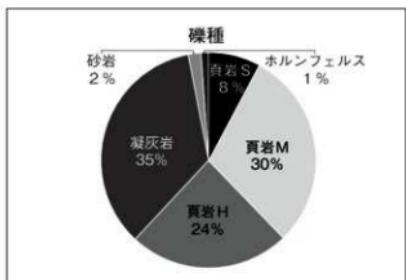


表6 種類・円磨度（ヤルミ沢河床）（S：軟質、M：中質、H：硬質）

番号	器種	主たる表面状態		主要剥離面 裏面の傷害	剥離角	幅	横	厚さ	重量(g)	岩石名	硬度	凹面度	出土層	実測団有り	
		正面	裏面												
1	剥片	剥離面	剥離面	-	99	5	0.6	3	12	珪質頁岩	H	シャープ	3	実測団有り	
2	剥片	剥離面	剥離面	-	105	7.5	9	1.8	91	珪質頁岩	H	シャープ	3		
3	剥片	剥離面	剥離面	-	116	7	3.9	1.3	26	珪質頁岩	H	シャープ	4		
4	剥片	剥離面	剥離面	上半欠損	-	64	3.2	0.4	17	珪質頁岩	H	シャープ	4		
5	剥片	剥離面	剥離面	剥離方向不明確	-	103	11	2.1	462	珪質頁岩	H	角錐	4		
6	剥片	剥離面	剥離面	-	94	3.2	5	0.3	6	珪質頁岩	H	シャープ	4		
7	未成品(石棺)	剥離面	剥離面	-	85	4.5	1.8	1.0	71	珪質頁岩	H	シャープ	4		
8	剥片	剥離面	剥離面	-	112	3.5	1.5	4	2	珪質頁岩	M	シャープ	4		
9	剥片	剥離面	剥離面	剥離方向不明	-	143	9.8	4.3	562	珪質頁岩	M	シャープ	4		
10	縫合	自然面	自然面	大損面有	-	98	10	4.7	601	珪質頁岩	H	亜円錐	4		
11	剥片	自然面	自然面	-	16	16	3.8	1.8	1138	珪質頁岩	H	角錐	4		
12	石核	剥離面	剥離面	-	86	8.2	3.6	2.7	27	珪質頁岩	H	角錐	4		
13	縫合	自然面	自然面	剥離方向不明確	-	102	7.8	4.5	329	珪質頁岩	H	角錐	4		
14	剥片	剥離面	剥離面	-	113	16.4	4.8	1.4	35	珪質頁岩	H	シャープ	4		
15	剥片	剥離面	剥離面	剥離方向不明確	-	8	5.4	1.9	102	珪質頁岩	H	シャープ	4		
16	剥片	剥離面	剥離面	打崩欠損	-	27	21	0.3	3	珪質頁岩	H	シャープ	4		
17	剥片	自然面	剥離面	剥離方向不明確	-	115	18.8	5.5	1080	珪質頁岩	H	角錐	3		
18	剥片	剥離面	剥離面	剥離方向不明確	-	7.4	7.2	3	172	珪質頁岩	H	シャープ	3		
19	打製作斧	剥離面	剥離面	欠損	-	6.8	2	31	160	珪質頁岩	H	シャープ	3	実測団有り	
20	剥片	剥離面	剥離面	上半欠損	-	5.6	3.8	1.4	26	珪質頁岩	H	角錐	3		
21	剥片	剥離面	剥離面	-	114	8.2	7.8	2.5	140	珪質頁岩	H	シャープ	3		
22	砂片	剥離面	剥離面	剥離方向不明確	-	125	6	2.4	260	珪質頁岩	H	角錐	4		
23	剥片	剥離面	剥離面	打崩欠損	-	8.8	8.2	2.3	111	珪質頁岩	H	シャープ	4		
24	剥片	剥離面	剥離面	剥離方向不明確	-	115	6.8	2.1	167	珪質頁岩	H	シャープ	4		
25	剥片	剥離面	剥離面	剥離方向不明確	-	12	11.1	3.6	499	珪質頁岩	H	角錐	4		
26	剥片	剥離面	剥離面	-	93	7.5	6.2	1	63	珪質頁岩	H	角錐	4		
27	剥片	剥離面	剥離面	-	114	9	6.2	2.3	121	珪質頁岩	H	シャープ	4		
28	剥片	剥離面	剥離面	-	99	4.5	5.1	1	36	珪質頁岩	H	シャープ	4		
29	剥片	剥離面	剥離面	-	108	16	10.2	4.3	728	珪質頁岩	H	角錐	4		
30	剥片	剥離面	剥離面	-	106	11.5	8.6	2.7	232	珪質頁岩	H	シャープ	4		
31	剥片	剥離面	剥離面	-	103	7.5	8.6	1.5	98	珪質頁岩	H	シャープ	4		
32	剥片	剥離面	剥離面	剥離方向不明確	-	66	8.5	3	239	珪質頁岩	H	角錐	4		
33	砂片	剥離面	剥離面	剥離方向不明確	-	7.9	8.2	3.5	239	珪質頁岩	H	角錐	3		
34	剥片	剥離面	剥離面	-	113	7.5	7	1.4	48	珪質頁岩	H	シャープ	4		
35	砂片	剥離面	剥離面	-	100	7.2	5.8	1.2	55	珪質頁岩	H	シャープ	4	実測団有り	
36	砂片	剥離面	剥離面	打崩欠損	-	32	0.7	0.7	2	珪質頁岩	H	シャープ	4		
37	砂片	剥離面	剥離面	剥離方向不明確	-	7	2	1.1	61	珪質頁岩	M	シャープ	4		
38	砂片	剥離面	剥離面	-	96	5.2	5.5	1.2	32	珪質頁岩	M	シャープ	4		
39	砂片	自然面	剥離面	-	120	4	3.5	0.8	13	珪質頁岩	H	シャープ	4		
40	剥片	剥離面	剥離面	-	104	7.2	6.2	2.4	25	珪質頁岩	H	シャープ	4		
41	砂片	剥離面	剥離面	剥離方向不明確	-	82	11.3	3	278	珪質頁岩	H	シャープ	4		
42	砂片	剥離面	剥離面	剥離方向不明確	-	7.1	4.5	2	66	珪質頁岩	H	シャープ	4		
43	砂片	剥離面	剥離面	剥離方向不明確	-	4.3	4.5	2.1	56	珪質頁岩	H	シャープ	4		
44	ハンマーストーン	自然面	自然面	側面に敲打痕	-	92	8.7	5.5	776	閃長岩	H	円錐	4	実測団有り	
45	剥片	自然面	剥離面	-	108	7	5	1.1	48	珪質頁岩	M	シャープ	4	実測団有り	
46	破砕塊	自然面	自然面	-	218	11.7	3	744	珪質頁岩	H	シャープ	4			
47	砂片	剥離面	剥離面	剥離方向不明確	-	7.2	3	2.2	29	珪質頁岩	H	シャープ	4		
48	砂片	剥離面	剥離面	剥離方向不明確	-	27	1.2	0.5	1	珪質頁岩	H	シャープ	4		
49	砂片	剥離面	剥離面	剥離方向不明確	-	7	4.1	1.5	56	珪質頁岩	H	シャープ	4		
50	剥片	剥離面	剥離面	剥離方向不明確	-	113	8	4	18	珪質頁岩	H	シャープ	4	実測団有り	
51	砂片	剥離面	剥離面	剥離方向不明確	-	9	6.1	3.3	227	珪質頁岩	H	角錐	4		
52	砂片	剥離面	剥離面	-	117	32	1.6	0.3	2	珪質頁岩	H	シャープ	4		
53	砂片	剥離面	剥離面	剥離方向不明確	-	106	6.2	5.2	327	珪質頁岩	M	角錐	4		
54	砂片	剥離面	剥離面	剥離方向不明確	-	35	2	0.3	5	珪質頁岩	H	シャープ	2		
55	砂片	剥離面	剥離面	-	90	3	3.5	0.6	3	珪質頁岩	M	シャープ	2		
56	砂片	剥離面	剥離面	剥離方向不明確	-	112	5.5	3	150	珪質頁岩	H	角錐	3		
57	砂片	剥離面	剥離面	-	90	32	1.3	0.2	2	珪質頁岩	H	シャープ	3		
58	未成品(石棺)	剥離面	剥離面	-	123	52	2.4	1.35	珪質頁岩	H	シャープ	3			
59	剥片	剥離面	剥離面	-	118	7.1	4.8	1.5	60	珪質頁岩	H	シャープ	3		
60	砂片	剥離面	剥離面	剥離方向不明確	-	18	7.2	4.5	513	珪質頁岩	H	角錐	2		
61	剥片	剥離面	剥離面	-	126	8	5.6	1.6	70	珪質頁岩	H	角錐	2		
62	砂片	剥離面	剥離面	剥離方向不明確	-	82	6.5	2.2	135	珪質頁岩	H	シャープ	3		
63	剥片	自然面	剥離面	-	107	5	3.5	0.9	22	珪質頁岩	H	シャープ	3	実測団有り	
64	剥片	剥離面	剥離面	剥離方向不明確	-	45	3	2.5	35	珪質頁岩	H	シャープ	3		
65	砂片	剥離面	剥離面	剥離方向不明確	-	39	11	0.6	5	珪質頁岩	H	シャープ	4		
66	砂片	自然面	自然面	-	17	12.9	6.1	1.03	珪質頁岩	H	角錐	4			
67	砂片	剥離面	剥離面	剥離方向不明確	-	85	3.5	3.5	53	珪質頁岩	M	シャープ	4		
68	砂片	剥離面	剥離面	打崩欠損	-	6.6	5.2	2	56	珪質頁岩	H	シャープ	4		
69	砂片	剥離面	剥離面	-	113	5.5	4.1	1.5	41	珪質頁岩	H	シャープ	4	実測団有り	
70	砂片	剥離面	剥離面	-	92	3.4	5	0.8	15	珪質頁岩	H	シャープ	4		
71	縫合	自然面	自然面	ノジユール	-	42	3	1.1	19	珪質頁岩	H	亜円錐	4		
72	砂片	剥離面	剥離面	剥離方向不明確	-	52	33	1.1	32	珪質頁岩	H	シャープ	4		
73	砂片	自然面	自然面	打崩欠損	-	28	1.8	0.2	2	珪質頁岩	H	シャープ	4		
74	剥片	自然面	剥離面	-	105	25	2.2	0.2	3	珪質頁岩	H	シャープ	4		
75	砂片	剥離面	剥離面	剥離方向不明確	-	6.6	32	2.5	26	珪質頁岩	H	シャープ	4		
76	砂片	剥離面	剥離面	-	119	7.5	4.6	2.3	74	珪質頁岩	H	シャープ	4		
77	砂片	剥離面	剥離面	剥離方向不明確	-	10	4.5	4	185	珪質頁岩	H	シャープ	4		
78	砂片	剥離面	剥離面	-	83	6.3	6.9	1.8	125	珪質頁岩	H	シャープ	4		
79	砂片	剥離面	剥離面	打崩欠損	-	39	26	0.3	5	珪質頁岩	M	シャープ	4		
80	砂片	剥離面	剥離面	-	111	45	3.2	0.5	8	珪質頁岩	H	シャープ	4		
81	砂片	剥離面	剥離面	-	104	37	1.9	0.3	3	珪質頁岩	H	シャープ	3		
82	砂片	自然面	剥離面	打崩欠損	-	172	15	7.8	1566	珪質頁岩	H	角錐	3		
83	砂片	剥離面	剥離面	下部欠損	-	103	82	6.5	26	126	珪質頁岩	H	角錐	3	実測団有り
84	砂片	剥離面	剥離面	-	100	33	2.8	0.5	4	珪質頁岩	H	シャープ	4		
85	未成品(石棺)	剥離面	剥離面	ノジユール	-	31	142	6.5	2800	珪質頁岩	H	角錐	3		
86	砂片	剥離面	剥離面	-	124	6.9	3.2	4.29	429	珪質頁岩	H	角錐	3		

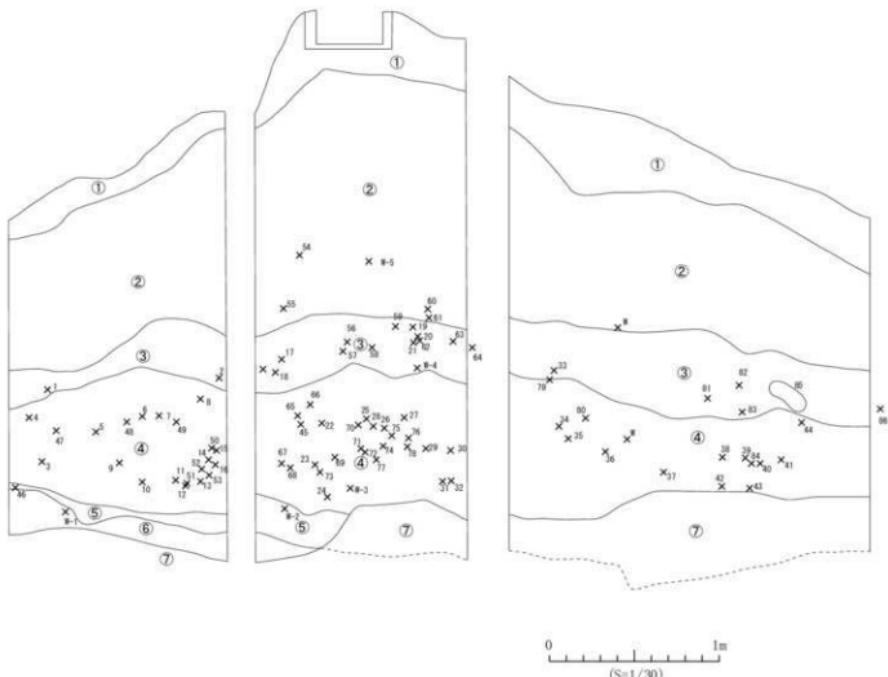
表7 ヤルミ沢採取遺物一覧表

ラボコード	測定試料名	試料情報	試料状態	処理
YU-4147	YM-0	トウヒ球果片 YM-0	矢見沢 W-0	超音波洗浄実施（純水、アセトン） AAA処理 1M HCl 80度 1時間 1M NaOH 80度 1時間（4回） 1M HCl 80度 1時間
YU-4148	YM-1	モミ葉片 YM-1	矢見沢 W-1	超音波洗浄実施（純水、アセトン） AAA処理 1M HCl 80度 1時間 1M NaOH 80度 1時間（3回） 1M HCl 80度 1時間
YU-4149	YM-2	木片 YM-2	矢見沢 W-2	超音波洗浄実施（純水、アセトン） AAA処理 1M HCl 80度 1時間 1M NaOH 80度 1時間（3回） 1M HCl 80度 1時間
YU-4150	YM-3	木片 YM-3	矢見沢 W-3	超音波洗浄実施（純水、アセトン） AAA処理 1M HCl 80度 1時間 1M NaOH 80度 1時間（3回） 1M HCl 80度 1時間
YU-4151	YM-4	アナ老斗 YM-4	矢見沢 W-4	超音波洗浄実施（純水、アセトン） AAA処理 1M HCl 80度 1時間 1M NaOH 80度 1時間（4回） 1M HCl 80度 1時間
YU-4152	YM-5	木片 YM-5	矢見沢 W-5	超音波洗浄実施（純水、アセトン） AAA処理 1M HCl 80度 1時間 1M NaOH 80度 1時間（4回） 1M HCl 80度 1時間

表8 炭素年代測定の試料

測定番号	試料名	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	曆年較正用年代 (yr BP $\pm 1\sigma$)	^{13}C 年代 (yr BP $\pm 1\sigma$)	^{13}C 年代を曆年代に較正した年代範囲	
					1 σ 曆年代範囲	2 σ 曆年代範囲
YU-4147	YM-0	-26.53 \pm 0.23	38129 \pm 203	38130 \pm 200	40528BC (68.2%) 40197BC	40697BC (95.4%) 40039BC
YU-4148	YM-1	-28.11 \pm 0.29	34746 \pm 152	34750 \pm 150	37528BC (68.2%) 37052BC	37761BC (95.4%) 36855BC
YU-4149	YM-2	-24.72 \pm 0.25	43293 \pm 319	43290 \pm 330	44857BC (68.2%) 44104BC	45331BC (95.4%) 43795BC
YU-4150	YM-3	-29.65 \pm 0.23	6111 \pm 24	6110 \pm 25	5191BC (39%) 5184BC 5058BC (64.3%) 4994BC	5207BC (137%) 5161BC 5119BC (10%) 5108BC 5080BC (80.7%) 4946BC
YU-4151	YM-4	-24.11 \pm 0.35	602 \pm 20	600 \pm 20	1309AD (27.0%) 1329AD 1340AD (28.6%) 1361AD 1387AD (12.6%) 1397AD	1299AD (74.0%) 1370AD 1380AD (21.4%) 1405AD
YU-4152	YM-5	-28.33 \pm 0.29	312 \pm 20	310 \pm 20	1522AD (50.7%) 1575AD 1585AD (34%) 1590AD 1625AD (14.1%) 1642AD	1494AD (74.2%) 1602AD 1616AD (21.2%) 1645AD

表9 炭素年代測定の結果



ヤルミ沢 露頭 注記

- 土色 土質 繰り
1. 10YR3/3 土 無し 腐食土層。
2. 10YR4/3 シルト 有り 砂層との互層堆積。
3. 一 繰 有り 直径 3 ~ 1cm 大の繰を 50%、直径 10 ~ 30cm 大の繰を 50% 含む。頁岩を含む。
4. 一 繰 有り 直径 40 ~ 10cm 大の繰を 80%、直径 1 ~ 3cm 大の繰を 20% 含む。頁岩多量に含む。一部円磨度の高い繰を含む。木質含む。
5. 一 繰 有り 直径 3 ~ 1cm 大の繰層。木質含む。
6. 5Y4/1 シルト 有り 10YR1.7/1 土ブロックを少量含む。
7. 5Y4/1 シルト 有り 硬質化している岩盤。

図10 ヤルミ沢露頭断面図

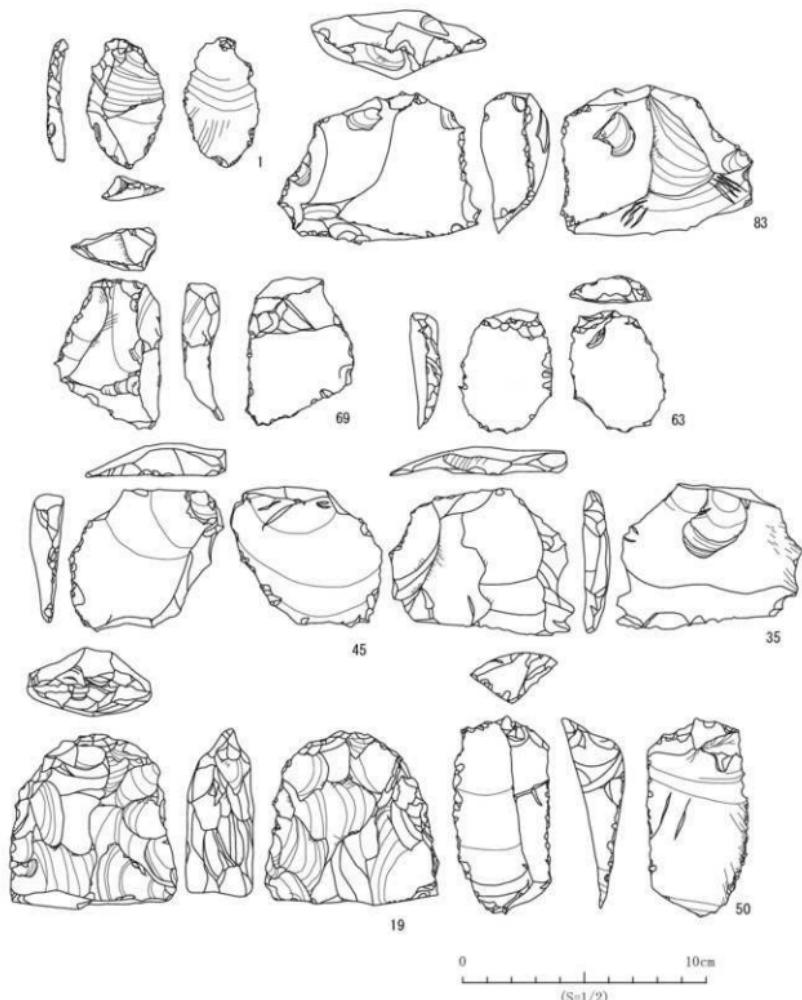
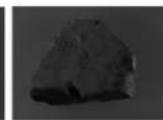
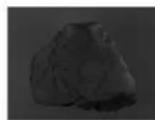


図11 ヤルミ沢露頭採取遺物実測図

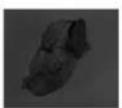
報告書抄録



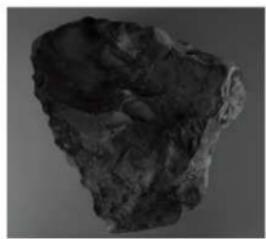
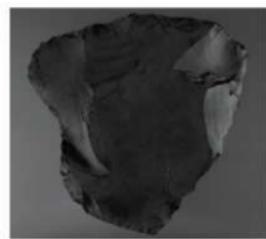
2



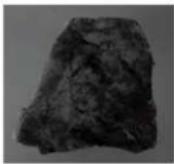
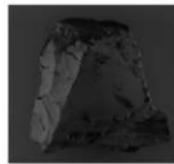
10



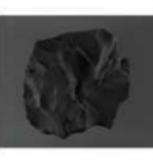
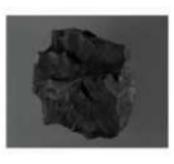
3



11



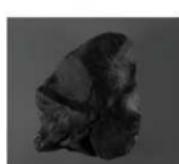
5



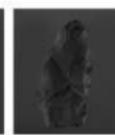
12



6



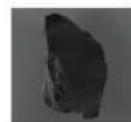
13



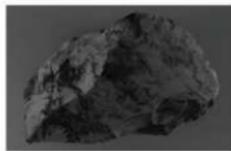
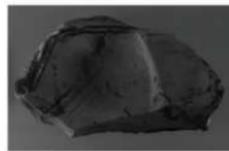
7



14



15



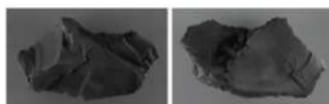
9

0 10cm
(S=1/4)

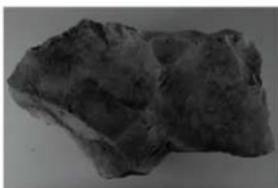
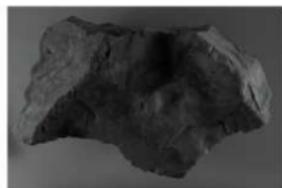
写真図版 1 ヤルミ沢露頭採取遺物 (1)



16



24



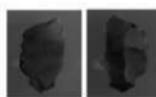
17



18



25



20



26



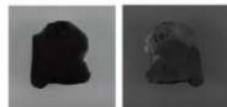
21



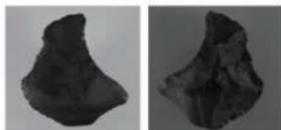
27



22



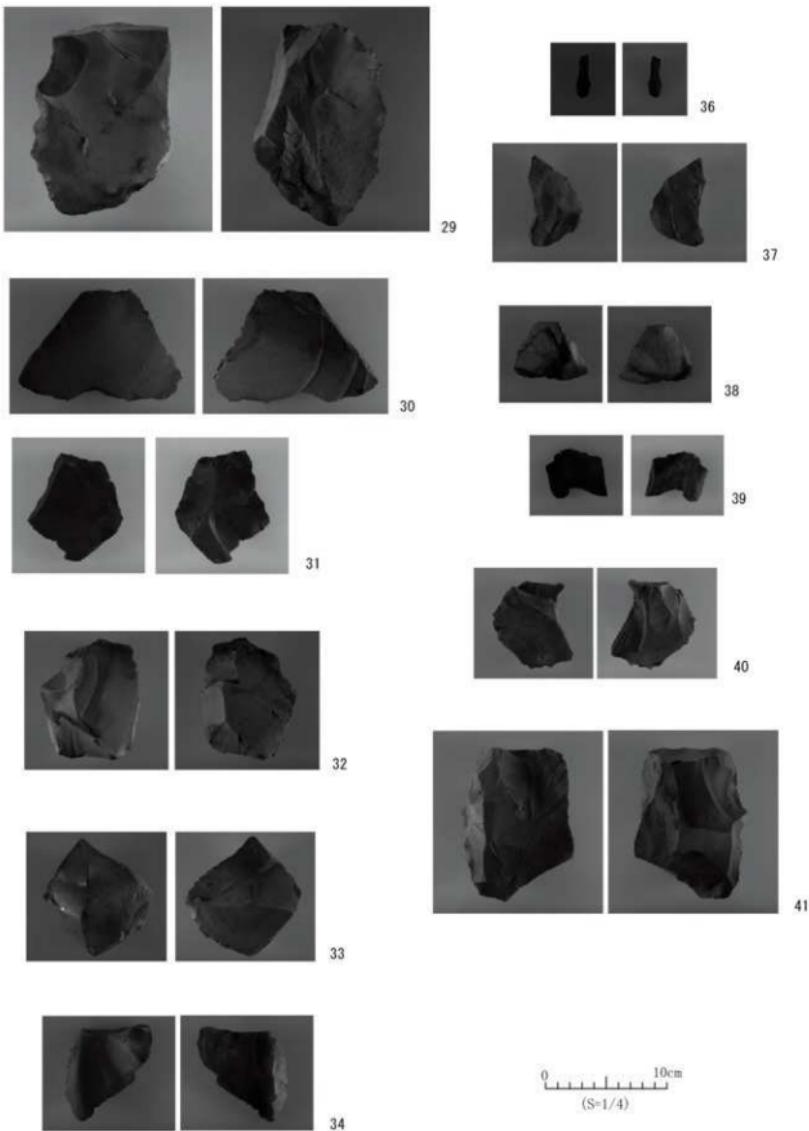
28



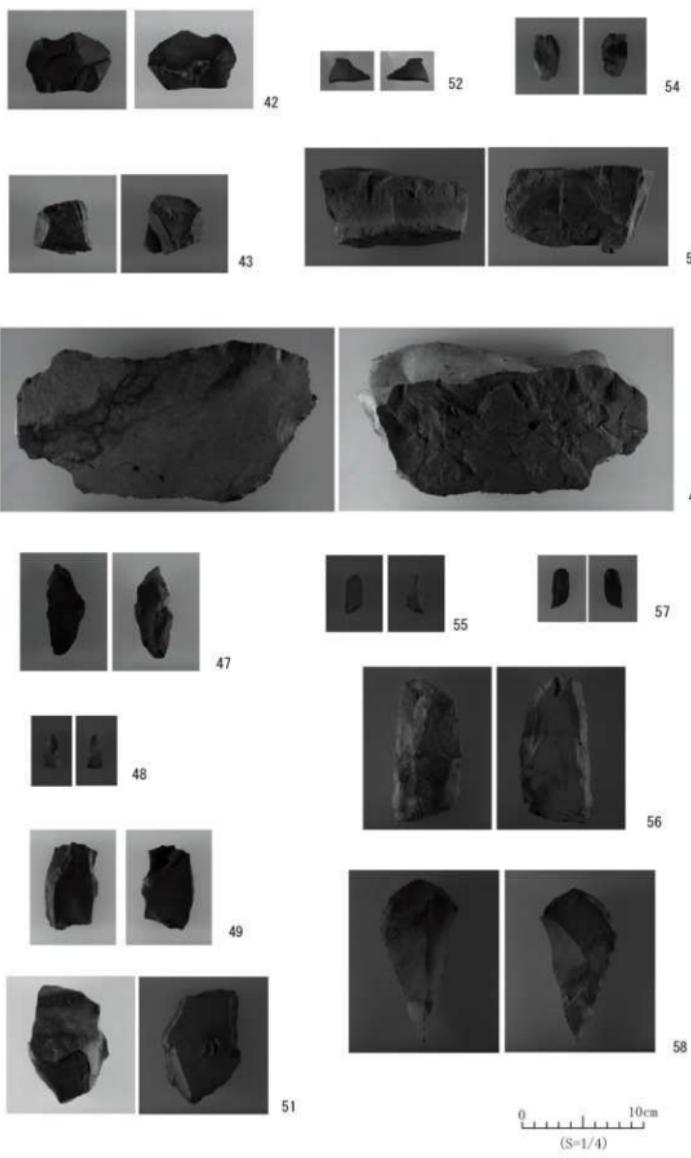
23

0 10cm
(S=1/4)

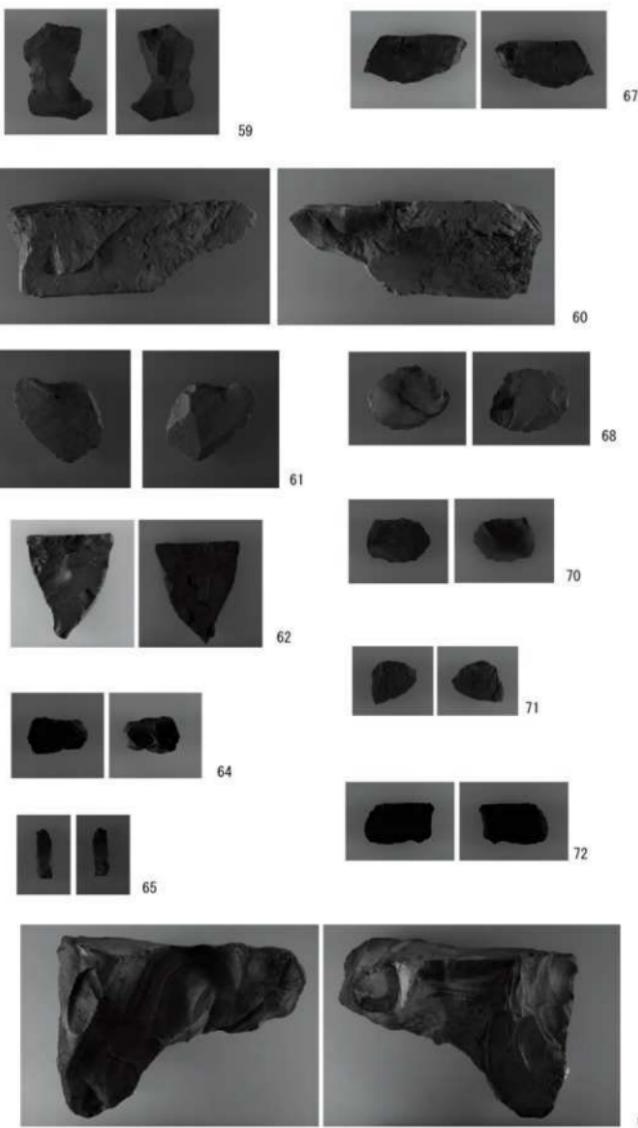
写真図版2 ヤルミ沢露頭採取遺物（2）



写真図版3 ヤルミ沢露頭採取遺物（3）

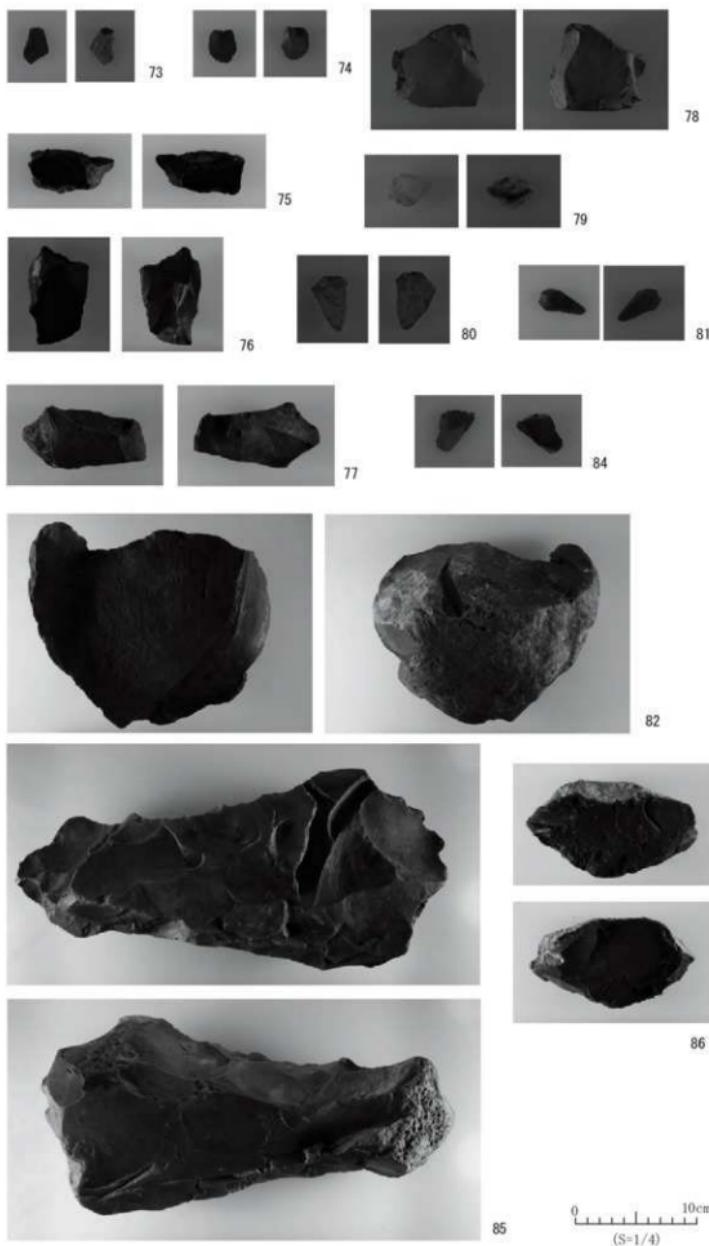


写真図版4 ヤルミ沢露頭採取遺物（4）



0 10cm
(S=1/4)

写真図版5 ヤルミ沢露頭採取遺物（5）



写真図版6 ヤルミ沢露頭採取遺物（6）



ヤルミ沢河床調査風景



ヤルミ沢露頭文化財保護審議会の視察



萩生城 G トレンチ調査風景



ヤルミ沢露頭調査風景



萩生城 A トレンチ調査風景

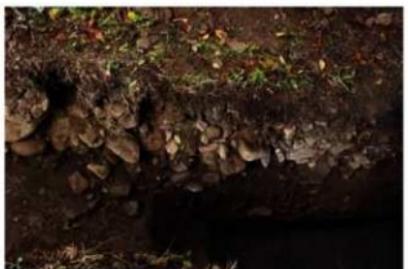


萩生城 A トレンチ調査作業



萩生城 I トレンチ掘削作業

写真図版7 ヤルミ沢・萩生城周辺調査状況



萩生城 A トレンチ（南から）



萩生城 E トレンチ（北から）



萩生城 B トレンチ（北から）



萩生城 F トレンチ（南から）



萩生城 C トレンチ（北から）



萩生城 G トレンチ（南から）



萩生城 D トレンチ（北から）



萩生城 H トレンチ（西から）

写真図版8 萩生城周辺トレンチ



萩生城 I トレンチ（西から）



萩生城 G トレンチ 出土遺物



萩生城 C トレンチ 出土遺物



萩生城 H トレンチ 出土遺物



萩生城 C トレンチ 出土遺物



萩生城 I トレンチ 出土遺物 棲瓦



萩生城 C トレンチ 出土遺物



萩生城恩徳寺境内採取 カワラケ



ヤルミ沢露頭遺物出土状況（東から）



ヤルミ沢露頭遺物出土状況（東から）



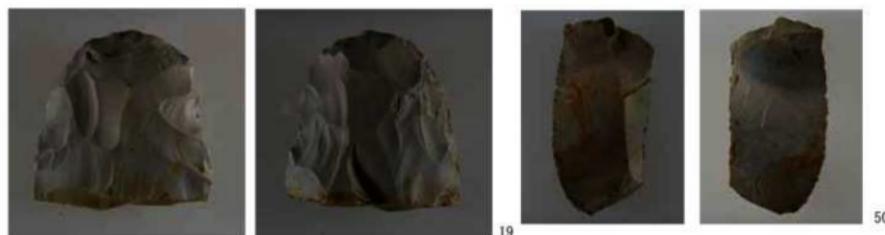
ヤルミ沢露頭遺物出土状況（東から）



ヤルミ沢露頭遺物出土状況（東から）



ヤルミ沢露頭断面（東から）



0 10cm
(S=1/2)



写真図版11 ヤルミ沢露頭採取遺物（7）

